

<翻訳>

キム・ヨンフィ トンハック チョンドギョ
金容暉 「東学・天道教の霊性と生命平和思想」

Kim Yong-Hwi, “The Thought of Spirituality and
Life-Peace in Donghak (Cheondgyo)”

ビョン ヨン ホ
邊 英 浩 [訳]

BYEON Yeong-Ho

解題

1860年に水雲・崔濟愚 (1824~1864年 水雲は号) によって創始された東学は韓国固有の生命思想、神観念を基軸としつつ、儒教を中心とし、老子思想、仏教思想、キリスト教的な要素をも取り込みつつ集大成したものである。崔濟愚は漢文とハングルとでその思想を書き残したが、韓国固有の人格神ハヌルニムを漢文史料では、天、上帝などと記した。しかしそれは中国思想における天、上帝などではなく、ハヌルニムを漢文で記すときに生じる現象であるため、あくまでも韓国固有の神観念であるハヌルニム信仰を内容としている。東学は人間の心はハヌルニムの心であるとし、人間と神との距離を圧縮的に接近させ、当時存在した身分差別を否定的に見る内容を持っていた。そのため東学は以後中下層の農民層を中心として急速に信徒を獲得すると共に、朝鮮王朝や当時の支配層である士族 (両班) からの弾圧を受け始めた。

崔濟愚は朝鮮王朝により1864年に処刑されたが、東学は第2代教祖の海月・崔時亨 (1827~1898年 海月は号) に伝授され、経典と教団の整備に尽力し、東学は一層民衆生活の中に浸透し大勢力に成長していった。そのため東学は中下層の農民層を中心とした信徒を獲得すると共に、朝鮮王朝や当時の支配層である士族 (両班) からの弾圧を受け始めた。その弾圧に反発したのが1894年に勃発した東学農民戦争である。当初東学農民軍は朝鮮王朝に抵抗し南部地域を中心とした独立王国的な勢力となっていったが、そこに日本軍が介入することにより壊滅的な打撃を被った。

東学農民革命以後、風前の燈火のようになった教団を継承したのは、第3代教祖の義菴・孫秉熙 (1861~1922年 義菴は号) であった。孫秉熙は日本からの弾圧を逃れるために、1905年東学の名称を天道教と改称し、教団を近代的な宗教組織体系に整備した。だが、孫秉熙は日本からの独立運動を放棄したわけではなく、1919年の3・1独立運動を主導し、獄中死することになる。

東学は韓国固有の神観念の集大成的なものとして韓国ではしばしばその画期的な意味が触れられてきた。しかし、日本では東学は相当誤解され、天道教という名称さえ知られていない状態である。日本における東学・天道教への一般的な受け止め方は、恨みと民衆反

乱、あやしげな民衆呪術といった反応に要約できる。思想内容に関心が薄い歴史学者、文化人類学者たちにより研究されてきたためであろう。

著者の^{キム・ヨンフイ}金容暉氏（高麗大学校研究教授、ハヌル連帯事務総長）は、2011年10月に日本の一般市民向けに「東学・天道教の霊性と生命平和思想」という講演原稿を作成された（肩書きは講演当時のもの）。訳者は、日本ではあまり知られていない東学のエッセンスとでもいうべき生命思想、神観念を簡潔に整理したこの原稿を日本語で紹介する意義が小さくないと考え、ここに訳出した次第である。なお翻訳にあたり^{パク・ウォンチュル}朴源出氏（天道教布徳師 2011年当時）による翻訳原稿草案があり、邊英浩がそれを活用しつつ訳文を完成させた。そのため、翻訳の責任はすべて邊英浩にある。

1. 序論

21世紀にいたっても世界は生命と平和、貧困と差別、民主主義の問題が改善されるどころか、むしろ深刻になっている。2011年春に勃発した日本の東北地方での地震と津波の惨禍、放射能汚染においてもみられたように、全世界の気象異変と気候変動、生態系破壊はますます深刻になっている。このような危機は現代文明の持続可能性に対して深刻な疑問を投げかけると同時に文明の根本的な転換を求めているといえる。

このような時期に今から152年前の1860年に朝鮮で創始され、文明の大転換を予告し全く新しい生の様式、即ち、生き方を促した東学・天道教をこの時代に改めてお話しするというのは意義深いことであります。東学・天道教の^{ス・ウン}水雲・^{チュ・ジンウ}崔濟愚先生（1824～1864年、号は水雲）は西欧近代文明の極点で、既にその衰退を予感し、「再び開闢」を主張しました。東学・天道教はあの時から今まで時代精神を代表し、韓国の近現代史に偉大な足跡を残した。1894年の東学農民革命は当時の最も大きな問題であった「反封建・反外勢」の問題に対する民衆の対応であったし、1919年の三・一運動は同じく当時の課題であった国の独立を勝ち取るための熱望が全民族的に噴出したものです。それから、1945年8月以降の解放空間での南北統一運動は、南北分断の危機の中での統一国家建設のための死にももの狂いの闘争でした。

東学は各々の時代ごとにその時代精神を^{わとう}話頭〔話頭は日本語の話題に近い意味：訳者註〕として掴んで、最も熾烈な社会的実践を傾注してきた。現在最も関心のある話頭は、やはり「生命と平和」です。生命と生態系の破壊や気象異変がこのまま進行するならば数十年もたたないうちに地球村は絶滅してしまうかもしれないとの危機の声が高くなっている。平和の問題もまた、歴史上最もひどい殺人が恣に行われた20世紀と比べてもそれほど改善できたとはいえない。地球を何度も破壊しても使いきれないほどの「核」の危険性はさらに大きくなっている。中近東はいうに及ばず、東アジアにも米国と中国の覇権争いが韓半島〔朝鮮半島のこと：訳者註〕を取り囲み、新しい冷戦体制が築かれるかも知れないとの観測もでている。

このような暗い展望の中にもかかわらず、東学・天道教は人類の精神的、かつ霊性的成長がもう一度実現し、新しい文明が開かれるとの希望のメッセージを伝えている宗教です。人類の第一番目の精神革命であった紀元前800年から200年までのいわゆる車軸時代に

匹敵する靈的・精神的な革命がもう一度起り、それに予め備えるのが東学・天道教であります¹⁾。そのような意味で東学・天道教が今日持つ生命平和の意味とそれらに基づいて東学の靈的革命に対し議論することには間違いなく意味があると思います。

2. 東学の創道（唱道・唱導）と展開

東学・天道教は1860年4月5日水雲・崔濟愚先生に依って創道された。先生は慶州の儒学者の家系に生まれた[崔濟愚の父は朝鮮朱子学の完成である李退溪(1501~1570年)の学派に連なる儒学者であった：訳者註]。子供の時から当時の混乱した時代状況に対して問題意識を持ち、塗炭の苦しみに落ち込んでいる国と万民をどのようにすれば救援できるのかという「輔国安民」の方策を求めようとして心を砕いた。その後10年間の全国の周遊、並びに7年余りの求道・瞑想の終りの37歳になった1860年4月5日、自らハヌルニム(하늘님天主)と問答をする神秘体験をした。[伝統的な朝鮮思想史では天を人格化しハヌルニム하늘님と呼んだが、東学ではそれと区別し、ハヌルニム하늘님と呼んだ。崔濟愚が残した漢文史料では、このハヌルニムを、天、天主、上帝と記しているが、全てこのハヌルニムを指している。：訳者註]

水雲先生はこの神秘体験以後、直ちに布教に努めたのではなく、一年ほど一層の修練に精進しつつ自分が体験したことを客観化する作業に邁進した。先生はこの過程でハヌルニム(天主)が超越的な人格神として存在するのではなく、自分自身の心と一緒にある(or 一所にある。原文は모셔져모쇼ジョ)との「侍天主」(신치옹주)を悟り、東学を創道した。水雲先生はこの「侍天主」を自覚することによって今までの神に対する理解を全く新しくするに止まらず、これを土台として、全ての人々が神々しく不思議で靈妙なハヌルニムと一緒にある(모신모신)存在として、平等であるばかりでなく尊厳なる存在であるとの人間理解をするにいたった。

先生は、また「十二諸国、怪疾運数、再び開闢であろう」(『龍潭遺詞』「安心歌」)と述べ、大昔の堯と舜の時代のような泰平盛世が必然的に再び回復することに定められているとの時運観を披瀝しつつ、新しい世の中が到来するという希望を民衆達の胸に深く植えたのです。

水雲先生はこのように人々がハヌルニムを各々の心と一緒にある侍天主の尊厳なる存在であることを自覚せねばならないといった。そしてそれは本来のハヌルニムの心を回復する「守心正氣」と私の心のなかに一緒にあるハヌルニム(天主)を至誠・恭敬・篤信により至極に奉ずる「誠・敬・信」の実践を通して可能だと説いた。その具体的な修行方法として提示したのが「呪文修練」であった。

一方、水雲先生はこのように自分が経験した宗教体験、及び悟りの内容を「漢文」と「韓国語のハングル」の両方の言語体系で表現した。その中で漢字漢文で出来ているものが『東経大全』(동경대전)であり、ハングルの歌詞形態となっているのが『龍潭遺詞』(용담유사)である。

以後東学・天道教は第二代教祖の海月・崔時亨(1827~1898年道号は海月)に伝授され、一層具体的な民衆生活の中にまで浸透することが出来た。海月先生は恩師の「侍天主」の教えを継承し、人々にハヌルニム(天主)のように事えなさいという「事人如天」(사이노천)の

(人に事えるに天の如くする。)の教えを説き、自ら行動で実践しつつ、当時の逼迫を受けた民衆、特に女性や子供たちまでもハヌルニム(天主)として恭敬するように教えた。そこからさらに先生は物さえも恭敬せよとの「敬物」思想を提示した。

一方、無能な朝廷と地方守令〔郡県の地方官のこと：訳者註〕の虐政に耐えられなくなって蜂起した甲午年(1894年)の東学農民革命は東学の平等思想を基盤として当時抑圧された農民たちの熱狂的な支持を受けながら新しい世の中を建設する旗幟を高く掲げた。しかし、これを切っ掛けとして清と日本が介入することになり、日清戦争にまで至り東アジアは波瀾に巻き込まれるようになる。以後農民革命は日清戦争で勝利した日本によって強制的に鎮圧されてしまい、東学はさらに地下へ潜り込まされてしまう。

東学農民革命以後、風前の燈火のような教団を継承した第3代教祖の義菴・孫秉熙先生(1861～1922年道号は義菴)は1905年に、それまで東学と称した名前を天道教に改称し、教団も近代的な宗教体系に整備した。卓越した指導力を発揮した義菴先生は1910年代に既に300万の教徒を養成する一方、三・一運動(1919年)を主導し、輔国安民の恩師の精神も正しく引き受けたのである。義菴先生はいつも教団よりは民族の独立が優先であることを忘れないように強調、喚起した。従って先生の還元(死去)以後、東学・天道教は宗教的な性格よりも社会運動の性格を帯びて、雑誌『開闢』をはじめとした出版運動を通じて民衆たちを啓蒙する一方、「児童・女性・農民・労働者・青年」運動等、言わば新文化運動を主導しながら社会的な変革と啓蒙的な実践に積極的に努めてきた。また解放空間では南北統一運動を展開してきた。これは後に南北両方の政治権力から天道教が弾圧を受けて勢力が萎縮してしまう原因にもなった。

3. 東学の霊的な革命、侍天主と守心正気

(1) シチョンジュ(侍天主)

東学・天道教は当時の極めて混乱した世の中を建て直そうとする水雲先生の「輔国安民」の熱望から生まれた宗教である。水雲先生は当時の世の中が乱れてしまった根本的な理由は、その当時の各々の人々が自分一人だけを大事にする利己心、即ち「各自為心」に落ち込んでしまったからだとした。先生は人間を人間として尊厳ある存在とするには自分の体と欲求にのみり込んでいる利己心を克服することから始まると考えた。先生の求道は、第一次的に各自の利己心を克服し、皆の生〔살 生命、生活などを含む意味：訳者註〕を尊厳あるものに変化させる道を見つけようとしたものです。

先生は7年余りに及ぶ刻苦の修練の末、ついに1860年4月5日ハヌルニム(上帝)より教えを受けることになった。ちょうどこの時に詳細な教えを下してくれる人格的な存在のハヌルニムに遭ったのである。しかし時が経過するうちに、そのハヌルニムは外在的、超越的な存在でなく、自分の体を通して絶えまなく作用を行う氣運であり、ほかならぬ自分の心であることがわかったのである。こうしてすべての存在の中にはハヌルニムと一緒にある侍天主シチョンジュが自覚できたのである。

このように「侍天主」という命題を自覚することにより東学を唱道することになった。従ってこの侍天主こそ真に東学を一言に要約したものだと言える。その中でも「侍」(モ

シダ모시다)の一字に東学の要諦総てが含まれている。そこで水雲先生は侍を自ら直接次のように説明している。『侍』というのは、内には靈妙な靈、即ち、神靈が有り、外には氣化作用が有って、世の中の人々全てが、ここから移らないことだ。』（『東經大全』「論学文」、「侍者、内有神靈、外有氣化、一世之人各知不移者也。」）

モシム（侍）の意味を三つに分けて、「内有神靈」、「外有氣化」、「各知不移」と説明している。我々の肉体の中には誰でも偉大な神聖な靈が入って我々の本質を形成していることが「内有神靈」であり、我々の肉体の内外で絶えまなく作用し、変化し、活動することにより、我々の生命活動を維持しているということが「外有氣化」である。そしてこの内外で神靈と氣化のおかげで作用できる生命の実状を完全に悟り、悟ったものから離れてはいけないということが「各知不移」である。

この中でも重要なのが「内有神靈」である。そのため『龍潭遺詞』で「あなたの体と一緒にいるのに、近くを捨てて遠くを取る（捨近取遠）のはなぜなのか？」と歌ったのである。「捨近取遠」というのは、近いものを捨てて遠いもの取るという意味であり、ハヌルニムを遠い蒼空に探し求めようとせずに、自分の中に探し求めよとのことである。これは他の宗教伝統において、「内面の光」、「真我」、「神聖な知恵」、「性品」などと言われて来たものである。現代の卓越した靈性家であるケン・ウィルバー（Ken Wilber）は「すでに各自に存在するが恐らく明るく輝いていないし、すでに各自に与えられているが正しく分かっておらず、すでに世の中を手がけているが、あらゆる試練の中で思いがけず忘れてしまう、そのような神性を発見すること」²⁾が、我々の最も重要な目標であると述べている。

我々はハヌルニムを自然の莊嚴な景観から、あるいは偉大な自然の神秘の中に見つけることができる。そして我々はハヌルニムを、食べるものがなく暮らしに困窮している人の瞳（ひとみ눈동자）の中に見つけることができる。しかし我々はそれ以前に、脇部屋（골방）から、また自分自身の深い内面からハヌルニムを発見しなければならないのである。

東学は水雲先生の侍天主の自覚によって生まれた。侍天主は神観に対する新しい理解と幅広い理解を持っているが、これは必然的に人間に対する新しい理解を強く求めている。失ってしまった主体に対する回復、人間に対する再発見の方向に進んでいくのである。自身の中からハヌルニムの神性を見つけた者は、これ以上過去の古い自分ではない。その人はその間、偽りの自己の中に埋もれていた自己の尊嚴性を再発見することにより、自己超越的な次元を開くと同時に、他のすべての存在の中にもハヌルニムを見つけることができる。このような侍天主の認識は当時のすべての人たちが階級や貴賤に関係なく尊嚴ある平等な存在であるとの認識に急激に拡張されていった。このように水雲先生はハヌルニムに対する理解を新しくしながら人間そのものに対する認識も新しく変えたのである。これは当時の階級矛盾と不平等に対する根本的な反省をもたらす結果にもなった。そしてこのような侍天主に対する自覚こそ、すべての生命と平和的な思惟の枯れることのない源泉になったのである²⁾。

（2）守心正氣の修道

水雲先生は神秘的な宗教体験を経て東学・天道教を創道したが、決してハヌルニムの権

能の力を借りて世の中を正しく立て直そうとしたのではなかった。先生はあらゆる人々をして、自分自身の中に神性を発見し、本来のハヌルマウム（天心）を悟り、それを失わないように努力することにより、自発的な道徳実践を可能としたのである。これが先生が新しく提唱した守心正気である。朱子学的倫理規範などが形骸化し、これ以上現実を克服できる指導的な理念として機能できなくなるや、先生は外在的な天理に依拠した倫理の限界を克服するためにそれを内面化し各個人の自覚的な修養を強調したのである。

水雲先生は「仁義礼智は以前の聖人が教えたものであり、守心正気はひとえに私が新たに定めたものだ」と述べて、東学の核心的な修道法が天心（ハヌルマウム）を常に守りながら気運を何時も正しくする「守心正気」にあることを闡明した。東学の修道法ではこのように心と気運を常に一緒に言及する。「守心正気」という時もそうであり、「君子の徳は気運が正しく、心が動かないので～」とか、「心が和し気運が和し（心和気和）、春のように和するのを待ちなさい」など、心を単独で使うよりは、常に心と気運を一緒に使用している。特段の準備なしに、はじめから直ちに心を以て修道の工夫に入ろうとしてもうまく進まない場合が多いため、先に気運工夫を通じて工夫の基本土台を創らなければならないためである。気運は体と感情の現在の状態と関連する生命エネルギーの流れなので気運工夫は言い換えれば体工夫とも言える。心と言うのは随時に変るものなので体と直接関連した気運工夫を先に行わずに、初めから心工夫ばかり行っても実智が得られない場合がしばしばである。従って、初めは気運工夫を通じて身体的なエネルギーを強くして心と調和できるようにすれば、これによって心の状態も調和を取れることはもちろん、感情と欲望を調節できる実際の力が生じるのである。

心の工夫というのは心を何時も清く明るく霊妙な状態を維持する修練を意味する。常に天心（ハヌルマウム）を守って維持する努力なのである。東学・天道教では「心乃ち天」といい、心を離れて別に天があるのではないとする。[心が天だとするのは、心が一番偉大なものであり、宇宙の主人であるということである。：訳者註] 従って、心の現在の状態を常に清く明るく霊妙な状態のまま維持することが、本当にハヌルマウムを正しく奉養することになる。これが海月・崔時亨先生が強調した「養天主」の意味でもある。それゆえ東学・天道教の心の学（工夫）は常に現在の心を察することを主とする。敷衍して言えば、現在の心が貪欲や憤怒、未来に対する不安と恐ろしさで胸が一杯になっているのではないのか、戦々兢兢として目の前の利益ばかりを気にしてあれが全部だと執着しているのではないのか、純粋な愛と言いながらも実は愛欲に溺れているのではないのか、自信感が強すぎて驕慢になっているのではないのか、以前受けた古傷や抑圧によって被害意識に捕らわれているのではないのか、度を越した悲しみに憂鬱症や無気力になっているのではないのか、などを把握してこのような否定的な一切の心から脱して清く明るく神霊なる心を回復するのである。このような心を回復することができれば一身の小さい利益にとどまらず、常に温和かつ平静な状態から周囲を見回せる余裕が生じる。

守心正気が東学修道の原理であるとすれば、呪文工夫は東学修道の具体的な方法であり道具だと言えます。呪文は単純なる呪術的な効果を狙って祈願する道具ではなくて、守心正気のための具体的な工夫の方法である。水雲先生は「十三文字を至極に行えば万巻詩書は何でもなく、心学といったがその意味を忘れないようにしなさい」（『東経大全』142

頁)として、誰でも呪文を熱心に唱えるだけでも賢人・君子になることができるとした。また海月先生も呪文21文字は大宇宙・大精神・大生命を描き出した天書であるといい、「侍天主シチョンジュ 造化定チョファジョン」は万物化生の根本を、「永世不忘ヨンセブルマン 萬事知マンサジ」は人々が食べて生きる祿の源泉であることを明かにしたものと意味付与をした。呪文は東学・天道教の核心を圧縮的に表すのみならず、それ自体が重要な修道法でもあるのである。

呪文修練は二つに大別して行なわれる。一つは絃誦法といい、大きな声で21字「『降靈呪文』、即ち『至氣今至チギクムジ 願為大降ウォニデカン』の8字と、『本呪文』の『侍天主シチョンジュ 造化定チョファジョン 永世不忘ヨンセブルマン 萬事知マンサジ』の13字」を一定のリズムで繰り返し唱える。これは氣運を主とする修練法である。これを繰り返せばハヌルの氣運と接することが出来、疲れた氣運が回復し心が明るくなるのは勿論、心に力が生じて来る。これを通じて良くない習慣や反復する失敗から離れて、常に心和氣和、即ち心が和すると共に氣運平静な状態を維持することが可能となる。

次の黙誦法は「降靈呪文」を除いた「本呪文」の13字を声に出さず(心の中で)静かに唱え、心の本体と宇宙の根本を觀ずる工夫です。これを通じて、心がすなわち天であることを完全に悟れば世の中の塵埃に染まった心から脱却し、本来の清浄な心を回復できるとします。これは本来の虚しく静かな本性(性品)を回復する工夫であり、真我(참나チャムナ)を探す工夫でもある。性品の本性は本来生じることも滅することも死も生もないものだと言われる。心が虚しくて静かな性品の座に入って行けば、それはいかなるものにも染められないし、いかなることに妨害されない大自由の洒脱自在な人格に達して自然に真の知恵が出てくるとする。このように絃誦を通じて氣運工夫を行い、黙誦を通じて性品工夫を兼ねるのが東学・天道教の修道法です。

要するに東学・天道教の守心正氣の修道は、結局心を本来の天心へ戻して行く工夫です。心が乃ち天マウムであり、心を離れて別に天ハヌルがあるのではない。従ってこの心をしっかりと握りこの心の中に本来からあったハヌルの種に毎日水をやり、肥やしも与え、愛でもって育て、心全てを香ばしいハヌル(天)の花畑に変えること、そのように心を天心に変えて創っていくのが東学・天道教の修道であり、かつ靈性の核心です。

4. 東学の生命平和思想

現今の危機を全て西欧近代文明の限界にする必要はない。西欧の近代学問の熾烈な真理探究の歴史と便利な現代文明への寄与に対して認めるべき点は認めねばならない。それにも拘らず、彼らが自然に対し生命を見る方式に問題がないとは言えない。あまりにも目に見える部分だけを一方的、かつ集中的に見たために、他の生命も含めて全一的に見ることができず、自然を征服し支配する観点のみからみたのです。従って生命現象を初めとした世界を見る方式が、全一的で統合的な観点から見るができなかったために多くの問題を露呈させました。

水雲先生はブリョンキョン(不然其然)を通じて世界をみる統合的な観点を提示した。ここでキョン(其然)とは、我々の感覚器官で経験することが可能なことや少しでも考えればすぐに分かることを意味しており、ブリョン(不然)は理性的な推論とか感覚的経験では全く知りえないことを意味する。西洋文明はここで外へ現れている次元、即ちキョン

(其然)のみに集中し、隠れている次元は全く無視してきた。水雲先生はこのブリョンキョン(不然其然)の論理を通じて現れた秩序の裡には必ず隠れた次元の秩序があり、外では矛盾し反対である現象も根元では統合されている事実を披瀝している。現象においては多様に異なるが、根元では一つに統合することが可能であることを意味する。このような統合的な認識は現象世界の多様な闘争や対立と相克を調和・和合・相生に転換させることによって生命平和の基礎的な知恵が提供できる。

また水雲先生は侍天主の思想を通じて、すべての存在が、さらには無機物さえも霊を帯びているし、生命があるとしました。宇宙の實在は見ることは出来ませんが、原初的な生命と霊性を持つ気運の塊かたまりであり、すべてがこのハヌル(天)の気運から化生したものとします。従って人間と自然もすべてがハヌル(天)の顕現です。この中にはハヌルの霊とハヌルの気運とハヌルの生命が内在している(内有神霊、外有気化、各知不移)。ハヌルニム(天主)は実体でなく、気と呼ばれる實在であり、それも霊性と生命をすでに自分の中に含有している宇宙気運、または宇宙生命であると見るとき、西洋の超越神観と東洋の汎神論、儒学の理気論が相い通じる道が開かれる。現今の宗教間の葛藤と反目が自分の宗教教理だけが絶対的な真理だと言う排他的な観点から始まることを勘案すると、東学の神観に対する幅広い観点はこのような排他精神を越えて対話と和合の道を歩める新しい形而上学的洞察を備えていると言える。

このような侍天主思想を継承した東学の第二任教祖、海月・崔時亨先生は侍天主を再解釈し「人がすなわちハヌル(天)であり、人に事えるのにハヌル(に事えるの)と同じようにせよ」とのサインヨジョン(事人如天)と、敬天・敬人に止まらずに自然万物までも恭敬する敬物にまで進んでこそ道德の極致に至りえることにより、生命に対する尊重をはるかに越えた恭敬の倫理を定立した。

「万物で侍天主ではないものがないので、この理致が充分理解できれば生き物を殺すのを禁じなくても殺生はなくなるであろう。ツバメの卵を割らず、その後ほうおうに鳳凰が飛んできてきまじょう草動し、草木の出た目を折らず、その後みづかに山林が生い茂る。自ら花の枝をたお手折ると、その実が得られなくなり、廃物を捨てしまえば金持ちにはなれない。飛禽ひきん三千も各々の種類があり、毛虫いのち三千も各々命が有り、万物を恭敬すれば徳が万邦に及ぶであろう。」⁴⁾

先生は追われる身であるにも拘らず、行く場所ごとに木を植えたり、縄を縛ったり、藁わら薦くを組んだりして少しも休まずに働きながら「我々の日常生活はすべて道でないものがない」としながら、高遠な別物と感じられた道を日常生活を通じて教えながら自ら実践した。また、家父長制の儒教社会では当然疎外されざるをえなかった女性と子供に対しても「婦人は一家の主人だ」「子供さえもハヌルニム(侍天主)なのだから子供を殴ることはハヌルニムを殴ることだ」として、弱者に対するいかなる抑圧と暴力も禁止した。また「夫和婦順」と言う説法を通じて夫と妻の関係を支配と服従の関係ではなく、お互いに和順に努めるべき平等的な相補関係であることを宣言した。そのうえに「過ぎ去った時には婦人を圧迫したが、今この運(数の時代)に向かい、婦人の中に道に通じて人を助けて活かす人が多くなり」、これからは一男九女の運であるとして、女性性が中心となる新しい文明の誕生を予告した。

このように先生はいつも温和で素朴な生活態度を持ってすべての人々を恭敬したし、すべての生霊たちにハヌルニムに対するように事えた。先生はいつもどん底の生活にある民

衆の立場に立つことにより東学的な生き方を自ら実践したし、「ムルムルチョン（物物天）・ササチョン（事事天）」（すべての物はすなわち天（ハヌルニム）であり、すべての事はすなわち天（ハヌルニム）である、ということ。：訳者注）とって一番小さなものにさえ天の摂理と氣運を感じながら敬畏した。

小さいものから生命を感じてそれをハヌルニム（天主）のように恭敬しなさいとの水雲先生と海月先生の教えは現代に住んでいる我々に自然と生命に対応する心得を教えているし、平和の本当の基礎は何であるのかを見せてくれていると言える。

5. 結論

東学・天道教は序論で言及したように新しい文明への大転換を予告し、その転換の時期に新しい靈性と新しい主体の再生を通じて病気だらけの世の中を治癒しようとする宗教である。まず内面に神性を見つけ出して、その神性をすべての存在にも発見して尊重する生き方、すべてをハヌルニム（天主）として恭敬する生き方が、今後文明的原理にならねばならないと確信する宗教です。

そのためには自己の身、自己の欲求だけに落ち込んでいる利己心、即ち「各自為心」から離れて、自己周辺の貧しく苦痛に呻吟している人たちの痛みを感じて共に参加して苦痛分担も行わねばならない。苦痛に対する共感が靈性であり、それを分かち合う実践が真の宗教です。私と私の家族のためだけの利己心、小さい私から離れて社会を考えながら人類を考えるような、より大きい私へ再び生まれ変わる時には、以前の自我はより成長した自我へと成長し、靈魂は高揚する。このような現在の自己を超越することで人格的尊厳性が生じ、その時に我々の生き方はやっと美しく厚みのある人格になる。

生き方の態度と生活習慣も変えなければならない。文明の転換というのも、結局「生活様式」の転換を意味する。消費の節約も行うべきで不便も耐えなければならない。人生観も社会的な成功とか立身出世とか外面的な華麗さや平安に置かず、不便でも生命を破壊しない生き方、仕事を分かち合い（ジョブ・シェアリング job-sharing）、不要なエネルギーと消費を最小化する消費文化への転換が要求される。闘争と競争を重視する男性性から配慮と生命の見守り、生活（살림）を重視する女性性の原理が重視されなければならない。それから現象の差異を尊重するが、それが根源では統合されていることを知る知恵が要求される。そこで果たしてどのような生命（^{いのち}益）の方式が本当の幸福の道であり、かつ生命と平和の道なのかに対する深い省察が要求される。

結論を申し上げれば、東学・天道教は、西洋の近代文明、現れているもの、物質、競争、男性性が中心であった先天文明の極点において、現今のこの世知辛い（강푹剛復하다）、病気だらけの世の中を再生させるために生まれた宗教です。東学・天道教は自分の内面にハヌルニムが一緒にいることを直接体験することによって自分の生き方を尊厳あるものに変化させると共に、これを基盤としてすべての存在の中から不可侵の神性を見つけて恭敬する倫理が文明的な原理にならなくてはならないということ教える「モシム（人の心は天）とサルリム（生活）」の哲学です。〔（ ）内は訳者の註記〕「内面的な靈性の外面的な開花が生命であり、平和である」。モシムとサルリムの靈性をいかに現今に再生してこ

の時代の生命と平和の価値として実践していけるのか、これが我々に与えられた課題であります。

註

- 1) カール・ヤスパーズ (Karl, Jaspers) は1949年に出版した「歴史の起源と目標に対して」という文章において紀元前8世紀から2世紀までの600年あまりの期間に各大陸で同時多発的に発生した思惟の創造的な革命、新しい宗教的なエトスの出現を「車軸時代」という言葉で表現したことがある。人類の歴史での第一番目の精神革命の花が咲いた画期的な時期、第一番目の文明の大転換期を指した用語である。それがギリシャ [Greece] の文明、ヘブライ [Hebrew] の文明、インド [India] の文明、中国の文明であった。
- 2) Ken Wilber, “One Taste—Daily Reflections on Integral Spirituality”, Random House, 2000. ケン・ウィルバー著『ケン・ウィルバーの日記 (켄윌버의 일기)』[김명권 (金ミョングオン)・인회준 (印フェジュン) 共訳]、学知社、2000年、14頁。
- 3) このような侍天主的な思惟自体は他の宗教伝統に見られないものではない。もしかするとこれがすべての普遍宗教の創始者たちが直接体験した靈性の中核ともいいえる。しかしハヌルニム、神に対する直接体験は以後の制度的な宗教への展開の中で危険視され主流的伝統から追い出されてしまい色褪せてしまった。しかしこれを水雲が再び活かして東学の最も核心的な思惟として明示した点に侍天主思想の意義があると言える。
- 4) 『海月神師法説』「待人接物」、『天道教教典』287～288頁。